第一部 総社編

1. はじめに

雪舟の生涯はまさに旅そのものであり、旅が雪舟の禅の道場であったと言ってもさしつかえないであろう。このような雪舟の姿を師と仰いだ松尾芭蕉は道中、雪舟の芸術に代わる文学をもって旅の友としたのである。人生そのものが旅であった人は多いけれど、雪舟のように道を説き、芸術に励みながら旅を続けたものは少ない。ある時は旅先の寺に滞在して禅の道や旅先での人情を語り、ある時は暇を惜しんでは独自の水墨画の世界を作り上げた。

2. 赤浜生誕説

雪舟は総社市赤浜に生まれた。この赤浜説は雪舟が亡くなって 200 年もたった元禄のころ、京狩野の 3 代目狩野永納が父山雪の残した稿本をもとに、儒学者黒川道祐の援助を得て著した「本朝画史」が最初に示した話である。赤浜には「画聖雪舟生誕碑」という雪舟顕彰碑が建っているが、碑文は昭和 14 年に記した山田準のもので、その内容は「本朝画史」系の雪舟伝に従っている。

3. 田中生誕説

雪舟の生誕地は赤浜説とは別に田中説があり、そこに「雪舟遺蹟碑」と記された雪舟顕彰碑が建っている。この周辺に足守川がつくった沖積平野が開けているが、土地が低く、雪舟のころは度々、冠水状態になったと思われる。この碑の由来によると、石見国出身の田熊権太左衛門信清が備中に移り住み大森氏に仕えていたが、大森氏が滅亡した後、この石碑近くに屋敷を建てて住んだ。やがて信清の子、源太は井山宝福寺に入山。寛正年中に明に渡り、禅を究め、画に熟達し、雪舟を名乗ったという。

4. 涙で描いたネズミの絵

「本朝画史」によると、雪舟は 12、3 歳で宝福寺に入り、涙で描いたネズミの絵で住僧を驚かせたと記してあるが、この話はあまりにも有名である。あくまでも逸話にすぎないが、雪舟の卓越した画才をほのめかしている話しにしてもその構想はすばらしい。雪舟は小田という武家に生まれながら武士としては出世せず、禅寺に小僧として入れられたということは、雪舟の家柄や境遇がそれほど恵まれていなかったということではない。だから、雪舟は生まれながらにして芸術への才能がそれとなく認められていたと考えるのが普通で、この才を生かすためにも僧籍に入れ、やがて相国寺に移されたと考える方が妥当である。

5. 総社市との縁

雪舟が少年時代に井山宝福寺に入山したかどうかは資料の不足で確認することはできないが「半陶文集」「梅花無尽蔵」などの資料では、早くから上洛して相国寺に入ったと記してあるが入山したという記録はない。それでは宝福寺入山説は架空の話だろうか。その宝福寺は雪舟没後、焼失しているので文献はないが、そうかといって雪舟と宝福寺との関係はむやみに捨て去ることはできないようだ。今も昔も総社市を支えている文化の底流には、総社市と都との結びつきが深かったのであろう。

第二部 京都編

6. 相国寺

雪舟を語る資料の全てが少年時代に相国寺に入ったと記しているが、入山した年月日や理由は明確ではない。相国寺は万年山相国承天禅寺といい、臨済宗相国寺派の大本山で京都五山の第二位である。禅宗では教えは師から弟子に厳しく伝えられる。雪舟にとって禅とは師の春林周藤であり、相国寺であった。洪徳は春林、雪舟は的子と記されてあるの
で、雪舟はあたかも春林の弟子であるようにみられていたようだ。絵の才能を持っていた雪舟であるから、その才能を最高に生かすためには、当時の水墨画の巨匠周文が都管の職であった相国寺こそ、最も画業取得にふさわしい禅林であったのだろう。雪舟は春林の教えに従いながら、周文からは水墨画の神髄を学んだのである。

7. 春林周藤

春林周藤は雪舟の師で、何かにつけて雪舟の生涯に大きな影響を与えた。春林は僧録司を務めたような人柄であったことから考えると、禅を修行すること自体が徹底したはずで、雪舟は画に専念することはできなかつたろうと思われる。つまり、雪舟は相国寺に入り、春林和尚に師事していたために画の修行には最も条件の悪い境遇に巻き込まれたようだ。ともかく春林の生活態度は無欲で篤実であったことは人もよく知るところであるが、雪舟もまた淡白であったようだ。春林が没したとき、雪舟は44歳になっているので、雪舟が永享2年に師事したとすると、ざっと33年にわたる永いつきあいだった。有形にせよ、無形にせよ春林の人柄に深く感化されたことは言うまでもない。

8. 天章周文

如拙を継いだものが天章周文である。雪舟にしては20歳代に周文の最盛期があったと思われる、雪舟がもし彼に師事したとしても、この期間だったであろう。その上、雪舟をますます不明確にするのは、現存の伝周文画が一つとして周文の絵だと確定できる絵画が一つもないことである。ともかく周文傘下の画僧たちが、画壇の主流を占めており、しかも年月がたつにつれてマンネリズム化した流れが見えはじめ、殊に雪舟が相国寺にいたころは、その画法や筆法が乱れ始めていた。

9. 室町期の画系

周文派の画風は時代の要請により中国の絵画を習得することであった。いわば、疑似中国画一辺倒であり、禅林画風は完全にその風潮に左右されていたのである。しかし、雪舟にしてみれば、この模倣の風潮は耐えられないものであったようである。やがて、彼は新しい画境を求めて相国寺を離れていった。画壇のマンネリ化を脱するには山水画を主流とした水墨画の新しい趣向による創作以外にはなかったのである。このように水墨画は室町時代に開花したが、雪舟は相国寺派の模倣的画法に疑問と反発を感じ、これを超えるには次元を超えた飛躍が第一だとして、今までの詩画軸的な作品から離れ、新世界を求めて山口に向かった。ともかく雪舟の偉大性は周文系の詩画軸に頼ることなく、あくまで自分の力で山水画の世界を築こうとしたバイタリティーにあった。

10. 拙宗

雪舟が「雪舟」という号を持つ以前に「拙宗（せつしゅう）」を名乗っていたのではないかという説がある。つまり、如拙、周文の流れをくむ雪舟であるから、これら両者の師の一字ずつの名を取って、拙周という名にしても少しも不思議なことはない。その「周」の字を「宗」にした「拙宗」の存在はやはり彼の前半生に大きな存在となってくる。さらに雪舟、拙宗と竜崗真圭との関係は「雪舟二大字説」によってもかなり深いものを感じる。この二字説は竜崗によって記されたもので、長祿元年（1457）、雪舟の38歳頃である。当時の諱と号は同通音のものを求めていたようで、雪舟にしてみればこの「雪舟」の二字をいかに大切にしていたかよく分かるというものだ。

第三部 山口編

11. 友人

雪舟は青壮年期の大部分を相国寺で過ごしたことから、彼の人生に影響を与えた友人は多く、また逸材ばかりで西国のものが多かった。竜崗真圭、勝剛長柔、牧松周省、桂庵玄樹、了庵桂悟、韞之慧鳳、汝南恵徹、季弘大叔ら雪舟を取り巻く友人たちはいずれも大内氏と深い関係の人々で、また京都における著名な文化人であり詩僧であった。このような文化的情報を友人たちから得た雪舟は次第に周防へと心が動いていった。京都内外の情報に加えて門閥主義の禅林に嫌気を起こしたのであろうか、雪舟は画壇自体のあり方にも不満を抱いていた。雪舟はこのような画壇のあり方を見て悲観的な日々を過ごしていたが、ついに思い立って山口の地へ足を運んだ。ともあれ、雪舟は相国寺を出たが、禅は捨てなかった。彼は終生、禅僧であったし、画趣もしばしば禅の精神を用いている。

12. 大内氏

周文派画法のマンネリズムを嫌った雪舟は周防山口に身の置きどころを求めた。山口は朝鮮、中国と最短距離にあり、貿易品としての中国の絵画を目のあたりに研究でき、新画

法の展開も実現可能なところであった。このような貿易にかけている町のイメージはただ中国から輸入した絵を模写するにすぎない周文派の画法のそれとはまるで違ったものであった。そして領主大内教弘は文化的にもすぐれた理解者で、山口に第二の京都といわれるようなすばらしい町づくりをとり入れるとともに積極的な文化政策を進めていた。

13. 雲谷庵

山口にたどりついた雪舟は大内氏の保護を受けて雲谷庵に落ち着いた。現在、その雲谷庵と伝えられる場所が2説ある。1つは山口市宮野の澄清寺跡であり、いま1つは近藤清石が再興した同市天花に現存する雲谷庵である。この雲谷庵は雪舟の友人であり、大内氏とも深いつながりがあった以参周省らのあっせんもあったであろうが、大内氏が雪舟のためにこの庵を設けて雪舟の来訪を待っていたもののようなのだ。後に天開図画楼として生活の安定をみることになるが、そのことは文明18年(1486)の了庵桂悟の「天開図画楼記」によって知られる。

14. 常栄寺

常栄寺には雪舟が作った枯山水庭がある。作庭年代は明確ではないが、大内政弘の依頼に応じて、大内氏別荘に作庭したといわれるから教弘が死没した寛正6年(1465)以後のことであろう。もともと大内氏は武はもとより文にもすぐれた政策をとっており、殊に芸術の愛好は並々ではなかった。雪舟が築いた庭は常栄寺本堂に面した裏庭にある。この庭の特徴は中央にある池の中の鶴亀石組や岩島の配置、そして手前の枯山水的な石組、山畔の石組などにあり、その構成は見事である。

15. 小京都

古都山口を彩る五重塔は、曹洞宗の古刹瑠璃光寺の境内にあって、誰の目にもすがすがしい対象として写っている。この古塔の向かい合わせに雲谷庵や大内氏邸宅跡などがあって、山口は、みやびやかな街のたたずまいを見せている。雪舟がこの山口を訪問した訳は大内氏の繁栄ぶりはもちろんのことだが、この街のもつ古典的な風雅であった。何しろ大内氏の経済力はすばらしく盛見のころは前代に倍するものがあり、香積寺に五重塔を建立している。香積寺はもともと大内弘世が応安4年(1371)頃、肥後の石屏子介を開山として招請し建立した寺で、義弘の戦死後菩提寺とした。雪舟としては「雪舟二字説」を依頼した竜崗とはこの香積寺を通じて親密な関係があったようである。

第四部 明国編

16. 遣明使

雪舟が明国に入ったのは足利義政の第二回遣明使派遣の時である。大内教弘も大内氏の船を使節団に加えようとして、居座に起叟永扶や大通寺の通樺、副使に桂庵玄樹をたてて

遣明使節団は成立した。玄樹は雪舟よりも7歳年下である。山口に生まれ、幼い時から京都の南禅寺に入り禅と儒学を修めていた。山口には水西寺に牧松周省がいて、雪舟とは昵懇の仲になっていた。雪舟は山口に滞在中慧鳳と再会して玄樹に会い、天与にも会えるという機会に恵まれて、雪舟の使節団参加もこのような友人関係からスムーズに決定した。

17. 天童寺

寧波に着くと雪舟は遣明使の常識的なルートとして天童寺に登った。この年、応仁元年（1467）、明では憲宗の成化3年にあたる。天童寺は禅の修行道場で宋になって五山に数えられ、栄西、道元らもこの寺で修行している。雪舟はこの寺で天童山第一座に推された。雪舟の仏画の表現、禅への世界観そして彼の品性から推してみると、第一座にふさわしいものがあったようにも思える。正使の天与清啓が乗船した細川船はその翌年になってやっと入明したので、すでに先に着いていた雪舟は彼らと同行して、北京に上り、遣明使としての役目を果たした。雪舟は明国の成化4年5月から翌5年2月まで北京に滞在したようで、この間に張有声や季在の二人に会い、設色と破墨の技術を学んだが、期待したほどの画家が明国にはいなかったことを述懐している。

18. 唐土

雪舟は明国でかなり多くの絵を描いた。その中でも北京の礼部院の中堂に壁画を描いたことは有名である。北京滞在は実質的には1年であるが、この間に雪舟は明の風物、習慣、あるいは宮廷画人と交流するなど広く実物を観察することができた。寧波から北京に通じる運河を往復するとき、雪舟は兩岸に展開する風景のスケッチに余念がなかったのである。「唐土勝景図巻」は縦28cm、横7m35cmの長巻で、その中に中国の大自然がパノラマ風に克明に描かれている。この図巻は現在、原本が失われているが、雪舟が帰国した時、弟子たちの間で模写されたものが残っている。

19. 金山寺

雪舟が中国で大いに感銘を受けたのは、中国大陸の膨大な広さと迫り来る自然の厳しさであった。彼は相国寺における修行時代に中国の山水画の模倣に明け暮れていたことを考えると、いかに雪舟の心に中国の風土を見たいという願望が焼きついてきたかが想像され、目に触れる物すべてをスケッチしておこうという雪舟の意欲のほとばしりを知ることができる。中国で寺院をスケッチした1つに「図巻」中の金山寺があるが、よほど印象に残ったと見えて、帰国後も丹念に厳しく描いている。この絵は謹厳な筆法で山上の楼閣や奇岩が正確に、寺院は設計図のように精密である。原本の「唐土勝景図巻」を見るかぎりでは、このように詳細に描くことは不可能に近い。恐らく雪舟はこのスケッチをヒントにして心の目で描いたものであろう。

20. 宝帯橋

雪舟筆「唐土勝景図巻」の中に呉江の街に続いて宝帯橋と書き入れのある石橋が長々と克明に描かれている。この宝帯橋は蘇州の東南郊外 3km、呉県長橋にあり、花崗岩の 53 孔の半円アーチ橋である。雪舟の図巻は長さ 7m35cm であるが、この宝帯橋のスケッチに 1 m80cm、およそ 4 分の 1 のスペースを使って鮮明に描いているということは、いかにこの橋に対する印象が強かったかが分かる。この橋に対する故事を聞いた雪舟は、自分を犠牲にしてまで、人のために尽くした役人の尊い姿に心打たれる物があった。そのように考えると、この図巻は単なるスケッチではなく、その橋の上で綱を引く人々の喜々とした歓声まで聞かれるようなほのぼのとした絵巻となっているのだ。

21. 山水図

雪舟が入明中に描いた代表的な絵に「四季山水図」四幅が残されている。雪舟の「四季山水図」はまさに季在風で、岩や山を重層的に積み込み、岩の皴や輪郭は奔放でしかも縮むように湾曲して描いており、周文派に見られない中国的な画法を見せている。雪舟は明朝画壇を期待して渡明したはずであるのに「揮染清抜の者はまれである。」と言い切った心情には、あるいは期待はずれの実情があったかもしれない。日本の画壇が宋元風といっても、せいぜい断片的な表現にすぎなかったことを知った雪舟は、宋風なものを求め、殊更、張有声や季在に接したといえよう。

第五部 九州編

22. 魚樂園

福岡県の中央部・田川郡の細長い盆地に川崎町がある。この町の荒平地区に古くから雪舟作庭といわれる藤江氏魚樂園があり、昭和 53 年、特別史跡名勝天然記念物の指定を受けている。雪舟がこの地を訪問したのは明から帰朝した後、大友親繁の招きで大分に向かう途中、立ち寄ったと考えられる。雪舟は多分、川崎町から添田町の亀石坊、深耶馬溪、由布院、大分とたどったものだろう。雪舟が明から帰朝したのは、文明元年（1469）5 月下旬である。寧波で徐璉から送別の詩をもらい、船団を組んで帰国した。雪舟が乗った大内船は筑前に着いたが、山口へすぐに帰ったのか、直ちに大分に行ったかは不明である。応仁の乱が治まったのは文明 9 年のことであるから、この期間の周防国は乱れていた。雪舟としては大内氏や入明に当たって努力してくれた人々に報告をすることが先決問題であったが、兵乱のない豊前、豊後を訪問したようである。

23. 天開図画楼

雪舟は豊後に滞在し、天開図画楼というアトリエに住んだ。雪舟の友人の禅僧、呆夫良心が書いた「天開図楼記」によると、広々とした大自然の風景をとり入れたアトリエだったことがよく分かる。図画楼記を読むと雪舟が住んでいるこのアトリエに多くの人が集ま

り、絵を求め、教えを請うたと記している。この 800 字にも及ぶ長文の天開図画楼記は、雪舟に対する多少のほめ言葉はあるものの、雪舟の伝記と作風を知る上で大変貴重である。ともかく雪舟は周防における不安な政情の乱れを避けて、大友親繁の居城、大分に足を運んだ。府内とあるから別府湾が眺望できる景色のよい高台に住んだのであろう。一説には入明以来親交が厚かった桂庵玄樹が豊後の万寿寺に行くというので行動を共にしたという。現在、大分市の上野にある金剛宝戒寺の境内に「天開図画楼跡」という碑が建っている。

24. 沈墮の滝

雪舟は大友氏の手厚い保護の下で天開図画楼に住み、穏やかな日を送っていたが、やがてこの安住の地にも兵乱の波が押し寄せてきたのでこの地を去ることになった。この頃の雪舟の絵に「鎮田瀑布図」がある。この絵は大正大震災で失われたが、雪舟の帰朝後間もない秀作の一つであった。幸いにもその模本が残っている。これは日本の実景をスケッチしたものとしては最初のものようだ。

25. 諸国遍歴

雪舟は一寺を守り、安定した生活を送るような僧ではなかった。彼は大自然を師と仰ぎ、旅から旅へと遍歴を重ね、旅に死んだ芭蕉はこのような雪舟の旅を師と仰いで、旅を枕にして俳句の世界に光を与えている。雪舟は大分を去るといったん山口に立ち戻った。大分を去った原因に豊後国にも兵乱が起こり、決して安穩ではなくなったことが挙げられるが、1 つには「天開図楼記」にみられるように雪舟が同じ所に長く滞在すると多くの人何かと集まり、彼の作画活動を邪魔されるきらいがあったからだという。雪舟の絵は自然との対話のなかにテーマとして描かれる。それは長年、修行した禅の道でもあるのだ。こうした絵は 50 歳代にして雪舟様式として確立したものとみられ、明らかに入明以前とは違った自然そのものへの挑戦があり、画家としての主体性、独自性に目覚めたものであった。

第六部 益田編

26. 益田氏

雪舟筆と伝えられる肖像画の中に「益田兼堯像」がある。この絵には「雪舟」という黒文重廓方印と文明 11 年（1479）の竹心周鼎の賛が着いていることから、当時、雪舟は益田を訪れ城主の兼堯に会っていると思われる。益田氏は山陰の一角を占める武将で、この肖像画によって広く知られるようになった。兼堯は益田家第 15 代当主で、益田氏中興の英主である。元来、益田氏と大内氏との交渉は親密でしかも長期にわたっている。殊に兼堯と大内氏の重臣、陶弘護とは重婚の間柄であった上に、兼堯自身もその子貞兼もまた孫の宗兼も 3 代そろって大内氏のために従軍していて勲功を立てている。益田氏の代々は崇

仏の念が厚く多くの寺院に寺領を寄進しその建立や補修に努めている。雪舟が訪れた時、兼堯は貞兼に世を譲り悠々自適の閑居生活をしていた。

27. 萬福寺

雪舟はしばらくこの萬福寺にとどまり、気の赴くままに寺の北庭に池泉回遊式庭園を造った。画家の雪舟が築庭を試みるのはいささか勝手が違う感じがするけれど芬陀院や常栄寺の場合と同じように、庭の構成に山水図の観念を盛り込むとしたらいっこうに不似合いではないはずで、むしろ雪舟の多才な創作意欲を知ることができる。この庭は中央の小高い須弥山の石組の集団が中心で、その下に心字池を造り書院前面を平地としている。須弥山手法の石組は、須弥山石を中心に螺旋形を描くように下降している。さらに須弥山の右方に枯滝石組があり、左方はなだらかな斜面上に三尊石が置かれ全体にみて配石が安定している。こうして雪舟は一生不住を原則とした時宗の宗旨に共感し、石山を中心とした庭の意匠として「無心」の芸術を築いた。

28. 医光寺

崇観寺住職応俊の後を継いで入山した雪舟は寺の後方の山肌を利用して築庭した。雪舟が築いた庭は当山背後の山畔を利用したもので、枯滝石組の上方に須弥山石を置いている。平地には鶴池を掘り、池の中には中心石、三尊石を背にした亀島を置き、その対岸に鶴石組をもつ蓬萊山水庭園である。さらに山畔上部に枝垂れ桜の巨木があって、春ともなると垂れ枝に満開の花を付け微妙にそよぐ趣は絶賛に値する。禅は「以心伝心、教外別伝」で、その教えとするところは文字ではなく心にあると言われている。したがってその芸術は心の芸術であるわけで、作庭も例外ではなくその心は「無心」である。その無心を芸術として庭に表したのが枯山水であり石庭となっているのである。

29. 山寺図

「古画備考」に収集されている資料の中に、村庵靈彦が着賛している雪舟筆の「山寺図」がある。この絵はもともと江戸の狩野派が持っていたが、火災で失ったらしく現在ではその模本しか残っていない。村庵は相国寺の僧で賛には81歳とある。雪舟がこのような日本の風景をスケッチしたのは、豊後の沈墮の滝に次ぐ二例目である。このように水墨画を日本化しようとしたのは、あくまでも中国的であるよりは、旅を重ねるうちに日本の風景に順応せざるを得なかったのではなかろうか。この図柄はまさに雪舟の行程を示すパノラマで山口から益田に向かって旅をした時の山河を詳細に描いた図である。近景の巨木は益田領境にある松。ここから丸い山（稲積山）の右麓をたどる石州街道を歩いて益田郷に向かった。中段右に見える山は益田城で益田川の手前に妙義寺（益田氏菩提寺）を描いた。中央の山は秋葉山。麓に式内社石勝神社の社殿。傍らに清滝が落ちている。中段左側は別当寺（勝達寺）。山麓に萬福寺が見える。この図柄一帯は神社仏閣の聖地であって中央の鳥居がとても印象的。雪舟にとっては益田氏の城下そのものが敬虔な聖地そのものだったのである。

30. 四季花鳥図屏風

雪舟在住の頃のいま一つの傑作に「四季花鳥図屏風」がある。文明15年(1483)4月、益田兼堯の孫の宗兼が家督を相続した時、その祝いに雪舟が描いた花鳥画の屏風である。おそらく雪舟は文明11年以後、益田を離れて京都に向かうが、所用を終えて山口へ帰る途中再び益田に立ち寄って制作したものだろう。益田氏は祖父の兼堯以下、貞兼、宗兼と3代にわたって健在で、多幸多福の雰囲気の中でこの祝賀が催されたのである。宗兼の母は津和野城主吉見頼弘の娘で室は陶弘護の娘だった。雪舟が描いた花鳥図はそう多くはない。雪舟の粋は山水画である。そうかといって山水画だけを丹念に描いたのでもなく、人物画もあるし花鳥図にも筆を染めている。花鳥図は桃山時代に入ると遠近景の奥行きがなくなりやがて近景のみが殊更に強調され、結局は模倣化しただけの装飾的存在となって、ついには空間部分が金地によってうめられた障屏画になってしまうことを考えると、雪舟の花鳥図の持つ意味は山水を背景に負って、遠近性を表現しているだけに花鳥図創造への過程が生々しくよみとれる。

第七部 畿内編

31. 天橋立

雪舟筆「天橋立図」の制作年代は図中に描かれた智恩寺の多宝塔の存在により、明応9年(1500)以降とされている。この天橋立図は、雪舟の数ある絵の中でも画筆のタッチがむしろ若々しく感じられ、画風からみてもあの「山水長巻」の老練な風格があまりみられない。このため明応年間(1492~1501)に描いた晩年のものではなく、文明年間

(1469~1487)に益田から京に向かった時、この地を訪問。絶景をスケッチし、後年大作に仕上げようとして手元に持っていたが、たまたま山口を訪れた学僧たちの話を聞いて加筆した可能性が考えられる。「天橋立図」は近景に東岸の連山を画面下方に描き、橋立の砂嘴との間に数隻の舟を浮かべ、中央には空に突き抜けるように世野山を、左方に文殊堂を克明に描いた。宋画に見える深遠法山水の鳥瞰的な手法だが、構図の中は霞を多く用いてはいない。近景も遠景も細部をぼかすというような情緒的な感じはなく、むしろ冷徹な目で画面いっぱい左右の構成を考えて精巧に描いている。

32. 多宝塔

「天橋立図」は現地で描いたものと考えたと明応10年以降、老骨にむち打って飢きんや一揆、さらに武将間の争いが各地に続発していた不安な世相の中を長旅したということになる。「天橋立図」中に見える多宝塔は明応9年、丹後守護一色氏の武将で、対岸の府中城主延永修理進が一の宮別当大聖院の僧智海に病氣全快を感謝して建てさせた。二重層の塔は今も完全に保護されている。何しろ明応9年は雪舟の最晩年で世相も不安だった。そこで、私は文明年間、雪舟が益田から京都に向かった時、船便で日本海を航海し、宮津港に入港した後、天の橋立を訪れてスケッチしたものと思っている。天橋立図の鳥瞰的ス

ケッチのヒントの1つは海上からの眺望によるもので、冠島、杳島の手入れがあることだ。つまり、日本海航路をたどった雪舟は冠島の傍らを通過後、宮津湾に入港し、智恩寺へ向かう途中の栗田峠に腰を落ち着けた。そこで入念にスケッチして智恩寺にいき、寺僧に对岸の寺院や神社の説明を聞いて書入れをして成相寺などを実地に訪れ、書き込んだのだろう。雪舟の風景画はそれほど雪舟の心の糧として、偽りのない風景画として残しておきたかったのである。

33. 東遊

文明13年(1481)の秋、雪舟は美濃国霊薬山正法寺に赴いた。正法寺は正平年間(1346~1370)に守護、土岐氏の菩提寺として建立され、以来、堂塔を整備していたが、雪舟が訪れた十数年後に焼失し土岐氏の滅亡とともに衰退した。現在はこんもりとした木立の中に小堂を設け薬師如来が安置してある。雪舟は天の橋立、正法寺、相国寺、東福寺、海会寺など近畿を一巡して帰路に就いた。山陽路や瀬戸内海航路を利用して西へ向かったが、ともかく三原をたどり仏通寺を訪問している。この寺には雪舟が住んだという篩月庵がつつましく残されている。この地方には雪舟ゆかりの地として庄原市の円通寺、広島県世羅町の康徳寺、同県甲山町の円満寺、岡山県芳井町の重玄寺などがめじろおしに存在する。おそらく雪舟はこのような臨済宗系の寺を巡りながら、中国山地を横断して益田城下に入り「四季花鳥図屏風」六曲一双を描いて益田家に贈り、山口の雲谷庵に帰り着いたと思われる。

34. 悠々自適

文明18年(1486)に東福寺を代表して了庵桂悟が山口を訪れ、雪舟のため「天開図画楼記」を書いている。この了庵の図画楼記は蔗軒日録や蔭涼軒日録によると、同年6月6日京都を出発して目的の周防に着き、翌19年3月27日に帰京しているので、雪舟67歳の夏、周防に着くとすぐ書いたものと思われる。雪舟は興にのり自由に、また人に依頼されるなどして多くの作品を描いた。万里集九の「屏風雪舟揚公所画跋」をみても、12枚の小画がはられていたとあるが、これも一つの例である。雪舟の作品を神品の上々といい、雪舟が描こうとするときは、まず清酒を飲み気持ちよく尺八を吹き、和歌を歌い詩を吟詠し、両足を投げ出して座りその後で意気揚々と描いたという。雪舟80歳の時、宗淵と親しく手紙を交換している。文面から子弟愛の温かさや画業を修行することの厳しさが見られる。雪舟は山口に滞在しながら多くの画僧・詩僧たちの訪問を受けて、悠々自適の生活を送っている。

35. 山水長巻

雪舟の大傑作は何と言っても「山水長巻」である。この長巻は突如としてその形式が生まれ大傑作となったのではない。雪舟は以前からこのような図巻を試みている。それらは京都国立博物館本「四季山水図」、山口県立美術館本「山水小巻」のほか、模本で知られる「倣夏珪山水図巻」などであり、いずれも山水長巻に連なる習作とみてよいだろう。山

水長巻の巻末には「文明十八年（1486）嘉平日天童前第一座雪舟叟等揚六十有七歳筆受」という署名がある。「筆受」と殊更に記したのは夏珪の作風に倣ったが自分流の解釈で描いたという意識と自負心があったからだろう。在明中に描いた傑作「四季山水図」は夏珪や牧谿風で対象の把握や描線の引き方に模倣するものがあって雪舟独自の迫力はないが、この図巻は「筆受」と書かれた程に強い個性が見られる。中国的な山水はあっても、基盤となるのは禅の心であり「天開」の広がりでもある。それは虚心坦懐に画業に専念した雪舟の素朴な姿の表れでもあるといえよう。

36. 慧可断臂図

「慧可断臂図」には「四明天童第一座雪舟行年七十七歳謹図之」という款記がある。雪舟はこの図を描くに当たって禅僧であることを自覚し、禅精神の聖なるものに浸って厳粛な気持ちで描いている。この図は巨大な岩壁に今にも押しつぶされそうな岩窟の中で、慧可が自分の左臂を断ち切って達磨の前に差し出している姿を描いている。「慧可断臂図」は歴史的にも有名な故事であるから、描くに当たって説明的なものであっては崇高な禅画は浮いてしまうだろう。もとより禅は何にも限定されない「無」である。「禅」を意識して描いたとしたら、もうそれでは禅でなくなってしまう。禅画というものは「禅」そのものを描くのではなくて禅への機縁を描くことが肝要だという。従って慧可断臂図の表現は描写的ではなく、一気に直覚的にあまり筆を入れない形式にしている。

第八部 晩年編

37. 山寺東光寺

「牛庵御奉公之覚書」の中に「雪舟（中略）極老にて石見之益田へ被罷越於彼地落命仕候」とあることから、雪舟は老齢で益田を訪問し、益田の地で死没したという説が有力になっている。牛庵は益田城第20代当主益田元祥の号で、この「牛庵覚書」は牛庵が毛利輝元に提出した文書を明暦4年（1658）筆録したものである。この寺は白水山と称し、後に妙義山と改められ俗に山寺と言った。雪舟が晩年、益田を再訪した理由も「大喜庵記」に書いているように、一にこの地が風光絶景の地であるばかりではなく、周鼎と親しく交際していたあこがれの土地であり、彼が住んでいた東光寺をこの上なく崇敬していたからであろう。雪舟は本尊観音菩薩の前にぬかずき、酒をくみ尺八を奏でた後で、水墨画を描いていたが、ついにこの地において文亀2年（1502）に83歳の生涯を終えたと言い伝えられる。

雪舟の遺骨は東光寺の丘に埋葬され宝篋印塔が置かれていたが、宝永の頃摩滅して退廃したので土地の人によって再建された。その雪舟の墓は高さ160cm、台石2段の上に扉を設けた石室を置き、その内部に「石州山地雪舟廟」と記され、石室内には雪舟の旧墓の相輪の部分が納められている。

38. 大喜庵（雪舟寺）

雪舟の死後、東光寺には雪溪芳白、益田長清、大谷知勝と相次いで入山し、天正2年（1574）には仏肝が仏門に帰依した仁保成隆と入山した。成隆は天文20年（1551）に大内義隆が陶晴賢のために長門（山口県）の大寧寺で敗死した時逃れて来たのだった。東光寺全山が焼失した後、跡地に仮礼拝堂が建てられたが、間もなくこの小堂も朽ち果ててしまい、慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いの後は、益田城主益田元祥が長州に移り、仏閣への保護が絶たれてしまったので東光寺一帯は叢林と化した。やがて元禄元年（1688）になると、大喜松祝は役の行者縁の大峰山で修行中、夢告により荒廃した東光寺跡の聖地に小庵を建立しようと計画した。藤井氏は平素より松祝に帰依していたので、喜んで土地を寄進し、近所の人々の奉仕によって元禄15年小庵が完成し大喜庵と名付けられたが、いつの日か雪舟寺と伝承されるようになった。

39. 画聖顕彰

雪舟の生涯はまさに禅と絵と旅で明け暮れた。旅が禅の道場でもあった雪舟は旅先の臨濟宗系の寺に仮宿し、地方の人々には教えを説き、あるいは絵の指導をしながら旅を続けた。従って雪舟の足跡は日本各地に点在し多くのファンを集めている。雪舟に関する伝承は山口市の常栄寺など雪舟庭園がきら星のようにあるのは、雪舟がその地を歩いたであろうという証明のようなもので、地区の人はその遺跡を大切に保護することが肝要であろう。雪舟の終焉地と伝えられる益田では大正15年、雪舟終焉地保存会を起し大喜庵を整備するために拠金を募って整備した。加えて平成2年、雪舟の郷記念館がオープンし、大正15年に始まった雪舟顕彰会の夢が実現したので、その時分関連付けられていた日本各地の画家たちと大喜庵との結びつきを今一度平成の時代にも呼び起こそうとしている。雪舟のもつ魅力はいくら述べても語りつくすことはできない。ともあれ、益田の人は画聖雪舟を「雪舟さん」と呼んで、殊に雪舟さんの墓は四季を通じて花の香が絶えたことはない。

40. 雪舟の郷記念館

記念館は平成2年に雪舟禅師銅像とともに竣工。人麿と雪舟の町・益田の歴史文化ゾーン「雪舟山水郷」の核として雪舟終焉の地に隣接している。建物は中世寺院様式をモデルにした和風建築で、天童寺（中国寧波市）を模した茶色の瓦葺きが落ち着いた景観を醸成し、周囲には雪舟死没の地といわれる大喜庵や小丸山古墳を望むことができる。館内ロビーから眺められる枯山水風の本庭（八景園）は、雪舟が描いた「花鳥図屏風」（重文）をヒントに築庭され、四季折々の画趣を楽しむことができる。大喜庵と雪舟の墓に通じる和風の回廊からは市街地が一望でき、館内外をゆったりと散策しながら雪舟の薫りを味わうこともできる。二つの展示室のうち、第一展示室では、雪舟と人麿ゆかりの資料や作品を紹介した常設展を、第二展示室では雪舟に私淑する現代日本画家の秀作日本画展を開くほか、年間2～3回雪舟や人麿に関する特別展、企画展を行っている。